

【Session 3-1】

異界をのぞく呪的なしぐさ

常光 徹

はじめに

私たちが日常生活を送っている時空間の外側の世界である異界や、あるいは、妖怪などの正体は通常では見ることはできない。ところが、各地に伝承されている俗信のなかには、異常な場面に遭遇したとき、異界を覗き見たり妖怪の正体を見破って危機を回避しようとする呪的なしぐさが少なくない。「股のぞき」や「狐の窓」のしぐさを取り上げて、呪的な伝承の諸相を紹介するとともにその意味について考えてみたい。

自分の股の間から顔をだして逆さまにもものを見ることを、股のぞきとか股眼鏡などという。風景があべこべに見える面白さから、児童の遊びのなかではたまに見かけるが、一般には目にする機会の少ないしぐさである。しかし、このしぐさに関する民俗を少し注意深く眺めると、民俗世界の興味深い一面が姿を現してくる。股のぞきをすると、妖怪の正体が見えたりとか異国の風景が見えるなどという俗信が各地に伝えられているのである。それは、このしぐさが、私たちの日常の時空間の外側の世界と深く結びついていることを示唆している。

日当たり雨の際に、狐の窓と称する特別の指の組み方をしてその窓（穴）から覗くと狐の嫁入り行列が見えたりとか、怪異現象に遭遇したときにこの窓から覗くと相手の本性がわかるなどという。江戸時代の文献にも見えているはやくから知られたしぐさだが、特徴的なのは、手の平と甲が同時に両面にある点で、これは表と裏が同時に存在する形といってよい。狐の窓は境界性を表現しており、そこにできる中央の窓は怪しいモノのひそむ異界を透視する隙間としての意味をおびている。人を化かしたり驚かしたりする妖怪変化は、その正体が露見したとたんに関力を失う。つまり、妖怪の正体を見破った瞬間から人の側が優位に立つといってよい。

絵画資料のなかには、呪的な伝承と脈絡をもつと考えられるしぐさが散見される。網野善彦は、絵巻にししばみえる、広げた扇で顔を隠して骨の間から覗き見るしぐさについて、公界の場でおこった異常な事態を見なくてはならない場合、あるいはそれを意識的に見ようとする場合のしぐさであると述べている。このしぐさなども狐の窓や道具類の隙間から覗き見るしぐさと繋がってそうである。

1 股のぞきの呪性

① 妖怪の正体を見抜く

船幽霊は、海で非業の死を遂げた者の亡魂が姿を変えて現れたもので、仲間をふやすため、いろいろな手をつかって船人をかどわかして海中に引きこむと信じられてきた。周防大島（山口県）出身の宮本常一は、島の沖で幽霊船に遭遇したという老漁師の体験談を、近所の若い船乗りと話したところ、すぐに幽霊船の見分け方について教えてくれたという。

これは怪しいと思う船を見たら股の間から逆見をするのだそうである。逆見をしてあたり前だったら幽霊船ではない。逆見をして、船が海面をはなれて、少し高く走って居るのを認める時は即幽霊船である、と〔宮本 1930〕。

股の間から逆見をするというのは股のぞきをして見ることである。同様の話を宮本は『周防大島を中心としたる海的生活誌』（未来社）でも「平中栄吉氏の話では船幽霊は股くらかがみをして見ると、船が海の上からはなれて宙を行っているからすぐ判るとのことであった。こういう船幽霊のことをアヤカリと言っている」と報告している〔宮本 1994〕。宮城県歌津町では「モーレイ船に出会ったような時は、マッタ（股）から上半身を逆さにして見ると正体がわかる」と伝えている〔国学院大学 2009〕。股のぞきをする、船幽霊の場合には「帆柱の十字の先がない」とか「船が海面を離れて走っている」といった何らかの異常が認められるという。かつて、海の仕事に従事する人たちのあいだでは、海上で怪異現象に巻き込まれたときの対処の仕方の一つとして、股のぞきをして見ればよいという知識が広く知られていたようだ。怪異現象に遭遇した際、股の間から見て相手の正体を見抜く伝承だが、海の怪異以外にもこのしぐさにはいくつか興味深い言い伝えがある。

昭和のはじめのころ、坂城小学校に勤めていて、宿直のために宿直室に泊まると恐ろしい思いをした。学校の五丁ばかり上の方の一本松のあたりから、緋の衣を着た大入道が出て、宿直室のへんまで来るとパッと消えるという。それでもしそれが出た場合には、股かがみをして股の間から見ろ、そうしないと、大入道がだんだん大きくなってとって食われる。股の間から見れば、大入道がどんどん小さくなって、しまいには消えてしまうといわれていた。これは「みこしの入道」といって、たぬきが化けたものだという（長野県坂城町）〔長野県 1986〕。

昭和の初め頃に長野県埴科郡坂城町の小学校でもち上がった騒動で、学校にまつわる怪談の一種だが、現在とちがって当時の校舎に出没するのは地域社会に伝承される伝統的な妖怪が多かったようだ。人を化かそうとする怪しいものに対しては、股のぞきをして見ることが一つの対処の仕方であった。そうすることで怪しいものの本性を見抜き、その害を回避できると信じられてきた。

② 未来の吉凶を見る

幼児が股のぞきをするのは次の子どもが生まれる前兆だという俗信が伝承されている。

- ・ 子どもがしきりに股の間をのぞくと次の子どもが生まれる（青森県七戸町）
- ・ 幼児が床に手をついて股を見ると母親が妊娠したという（秋田県仙北郡・雄勝郡）
- ・ オトミ子が股のぞきをすると次の子が生まれる（新潟県）

幼児が面白がっておこなう股のぞきを、このように理解することについて新潟県川西市では「赤子が股かがみすると次の子が間もなく生まれる。子どもには次に生まれるボボ、赤ん坊の姿がみえる」からだとして説明している〔中村 1959〕。

俳句に岡見という季語がある。『大歳時記』（集英社）を開くと「大歳の夜、高い岡に登り、蓑を逆さに着て自分の家を見ると、来年の吉凶が見えるという俗信」と説明してある。歳の晩にまつわる変わった俗信だが、これも未来を見るための方法らしい。『大歳時記』の説明には股のぞきという言葉はないが、山崎美成の『提醒紀談』（嘉永三年の自序あり）を読むと岡見の解説に股のぞきが登場する。

吾邦の古も大歳の夜をかみ草摘とて、高きやにのほせて蓑笠さかさまに著なして、明の年の運を見

るとかや。古歌に、ことだまのおぼつかなきにをかみすと梢ながらに年を越すかなとよめり。十二月晦日、岡に登り我両足の間より居地の気を観て、明年の吉凶を知る。これを岡見といへり〔日本随筆大成 1973〕。

「我両足の間より居地の気を観て」とは、股のぞきで見ることであろう。折口信夫は、岡見について「歳時記類に見える『岡見』という季題は、必全国的の事ではなく、一地方の行事であったものを採用した事が思われるが、歳末大晦日の夜の事となって居る。深更、里の人々笠を冠り、蓑を裏返しに着て、里の岡に登り肩越しにわが人居を見ると、来年一年中の出来事が、予め見えるものだ、と伝えて居たと言う。旧日本の古俗を遺す沖縄にも、此に似た風がある。此夜、丘上から魂の遊離する一たまり一を見ることがある。すると、其家の人は死ぬのだなど、も言う」と述べている〔折口 1976〕。

来年の吉凶が見えるというのは具体的にどのような状態をさすのだろうか。小池淳一の『伝承歳時記』のなかに「箱山貫太郎は幕末の信州上田での聞き書きの記録『小百合の杣』に、除夜に蓑をさかさまに着て高い岡に登って、来る年の吉凶を占う記事があると報告している」と述べて、箱山のつぎの文を紹介している〔小池 2006〕。

近頃下戸倉の人の語るをきけば、大晦日の夕べ、まだ日のくれぬ程に、高きに登り、そこは彼が家、ここは誰が家と思ひさだめて、くるるを待ちて見るに、たとえば喜びごとある家は、うたい舞などする様に、いとにぎわい、悲しみ事ある家は、なき声など、うれい多く思われ、火あらん家はほの気たつ様に見ゆ、げに来ん年のあらん様、さだかなりといえり、そは若人の誰も、たれもすることにて、其の時草履を懐にして行きて、もし神におわるることあらば、その草履、あらぬ方にぬぎたるさまにおきて家路に逃げ下ることと昔より伝えあれば、今もさはすることなりといえり。

大歳という境界の時間に臨んで、蓑を逆さまに着けた異常な姿はなにを意味しているのだろうか。逆さまというのは、蓑の上下を反対にするか、もしくは折口のいうように裏返しに着けることにちがいない。そして「蓑を逆さまに着けて見る」とことと「股のぞきで逆さまに見る」とこととはおそらく同じ意味をもつのであろう。逆さまは、象徴的に日常性をひっくり返す行為であって、妖怪・幽霊・あの世など私たちの日常の時空間の外側に想像された世界と通じ合う。その上で逆さまには、そうした世界から侵入してくる邪悪なモノを阻止するつよい意志が示されている。

蓑を逆さまに着けることと股のぞきを、もう少し細かく比較してみると、単に逆さという現象が似ているだけではない。股のぞきのしぐさの特徴は、対象に尻を向けた格好で、つまり相手を見ながら、それでいて相手の様子をうかがう姿勢である。上半身と下半身の向きが逆で、顔は下にさげて後ろを見ているが足は前を向いて立っているという、上下と前後があべこべの関係を同時に体現した形といってよい。一方、蓑を逆さまに着けて立つのも同様に上下あるいは裏表の矛盾した姿であり、そうした状態で折口がいうように「肩越しにわが人居を見る」のは、岡から人居の方に背を向けたままで肩を通して後ろに視線を送ることである。つまり、大歳という境界の時間にのぞんで、一つの形のうちに上下（裏表）前後を同時に表現するこれらのしぐさ自身が、二つの領域に接していながらそのどちらでもないという境界的な性格を帯びている。

岡見の習俗が民間伝承としてどのように展開してきたのかはよくわかっていないが、新潟県北蒲原郡のあたりのコト八日にまつわる言い伝えは興味深い。

コト八日の前夜を北蒲原郡では、オッカナの晩げという。この夜は、一つ目の化け物がくるといわ

れ、目の多い糶とおし・箕・ザルなどを門口にさげる。(中略)新発田市宮古木では、オハギ三個を三本股の枝にさして戸口に出し、ソバ殻、糶灰などを入口の小路にまく。同市川東地区では、厄神が家に入ると鍋・釜・下駄の齒にまで化けるといい、屋根のグシの上で半切(はんぎり)に水を入れてみると狐の嫁取りや祝言、葬式のある家の様子がわかるとし(五斗蒔)、みの・笠を逆さに着て、屋根のグシの上でみると、火事・災難の家がわかるという(滝谷)。六日町五十沢郷では屋根のグシの上で股からのぞくと、化け物や死者の姿がみえるといわれている。また、この夜は化け物がくるので、早く戸を閉め、明りが外にもれないようにし、夜の外出も遠慮する〔新潟県 1982〕。

コト八日とは2月8日と12月8日のことで、その前夜をオッカナの晩げと呼んでいるように、この夜は一つ目の化け物が来ると信じられ、各家ではさまざまな魔よけの行事が行なわれてきた。新発田市滝谷で、蓑・笠を逆さに着て屋根の上から見ると火事・災難の家がわかるというのは、未来を見通して災禍を未然に防ぐ狙いであろう。これは、屋根の上から股のぞきをするると化け物や死者の姿が見えると伝える六日町五十沢郷の例とともに、岡見に繋がる民俗だと推測される。

③ 異国を見る

股のぞきについては、近世の俳人として知られる堀麦水の『三州奇談』に、唐島の異観と題するこんな話が収録されている。

友文鵝なる男興じて咄す。里諺に此堂の縁にうつむきになり、股の間より海畔を望めば、必ず異国の人家か蛮界の人家を見ると云ふ。故に多く唐を見んとて、内股の間に首を入れて興ず。人家或時はふしぎにも見え、又見馴れざる所の見ゆることもあり。先年開帳の時は、麓の岩間に茶店を設けて、岩間を直に生洲となして鯛・蛸の類を放し置き、酒を売りしに、人々多く押合ひて食するに、其頃我も渡りて酒に興じ、打倒れて夢も半の頃、早や人大方帰り尽きて淋しくなりし頃、不図目覚めて彼俗諺を思ひ出して、股より覗き見しに、山上より来る一人あり。唐装束を着し、髪は女の如く唐子髷にして、手に大旗を持来る。大いに怪しみ、不思議々々々と感じる間に、異人間近く来たり、ハンメリ、、、といふ。驚きて手に持つ旗を見れば、ハシリカンフラと書き付けあり。扱は菓売殿にてありしと初めて知りしが、時しも此内股より覗く所へ来かゝりしは、渠も又應の通れざることありしにやと、をかしく帰りしぞ〔石川県図書館協会 1933〕。

唐島は富山県氷見市の氷見漁港から300メートルほどの沖合に浮かぶ小さな島で、ここには弁財天をまつお堂がある。現在も5月3日の唐島祭りには、弁財天の像を市内の光禅寺から島に移して、海上安全と大漁を祈願する。当日は、数多くの漁船が旗をなびかせて参詣の人を唐島に運び、島は吹流しや提灯でいっぱいになるという〔氷見市史編修委員会 1963〕。かつて、この島のお堂の縁から股のぞきで海を見ると異国の人家が見えるといわれ、人々は競ってこのしぐさに興じていたことがわかる。著者の麦水自身も関心があったようでご開帳で島に渡った際に試みている。そのとき見えた唐装束の異人は実は旗を持って歩いてきた菓売りだったとオチがついているが、もともと見えるはずのない異国が見えるという発想そのものが、通常では見えないものを見ようとするこのしぐさの一類型である。

以上のようにみえてくると、ふだんは子どもの遊び以外にはほとんど顧みられることのない股のぞきだが、民間伝承の立場からは興味深い問題が隠されていることがわかる。一言でいえば、異界を覗き見るしぐさといってよいだろう。

股のぞきから見える、あるいは見ようとする対象は、私たちの生活領域の向こう側、私たちが所属し

ていると認識している時空間の外側の世界に属している。整理をすれば、

- ・ 船幽霊や死者の霊など、妖怪や幽霊の正体
- ・ 新しい年の吉凶や、次に生まれてくる子どもの姿
- ・ 見えないはずの異国の風景

などである。日常では見ることのできない世界が股のぞきの向こうに透けて見える。そして、妖怪変化の姿やその正体を見破ることは同時に、それらの侵入を防いで退散させる力でもあり、股のぞきには魔よけの効果もつよく意識されている。

2 狐の窓と怪異現象

① 日当り雨と狐の嫁入り

動物をモデルにした妖怪は少なくない。狐、狸、猫、川獺、蛇などが挙げられるが、なかでも狐の知名度は群を抜いていて、人を化かすことにかけてはこの動物の右にでるものはない。少し前まで、狐に化かされて一晩中山中をさまよった挙句に腰の弁当をとられてしまったなどという話をよく耳にしたものである。そこで、いざという場合に備えて種々の対抗手段が用意されている。

- (a) 狐に化かされた時は、頭に草履をのせるとよい（愛知県）
- (b) 狐に憑かれたら背中に犬という字を書いてたたくとよい（愛知県）
- (c) 夜、山道を歩くとき、親指を中にして手を握っていると狐に化かされない（和歌山県）
- (d) 狐に化かされぬためには、着物の裾をしばって旅をすればよい（愛知県）
- (e) 狐に化かされた時は、地にかがんで棒でなぎ払えばよい（鹿児島県）

(a)の、足に履くものを頭にのせるのは、身体が一番下につけるものを一番上に移すわけで、踏むものに踏まれるというあべこべの行為である。つまり逆さまの呪法的一种と考えられるが、身体を「踏みつける」ということに意味があるのであろう。(b)は、化け物や幽霊が犬を嫌うという伝承を下敷きにしたもので、鋭い嗅覚で人間が気づくよりもまえに怪しいモノを察知して吠え立てる犬の習性が背景にある。(c)は「霊柩車に出合ったら親指を隠す」まじないと同じで、邪悪なモノが爪の先、とくに親指の先から侵入するという観念からきている。(d)の場合も、着物の先端部分から霊的なモノが出入りするとの恐れから裾をしばって防御するためのようだ。(e)は、人を化かしている時の狐はその正体が低いところにあることを教えている。福島県南会津郡舘岩村では「魔物に化かされた時には地六（じろく）を狙え」という。地面から6寸（約18センチ）上に魔物の正体があるという意味である。他にも「狐に化かされたら眉に唾をつけるとよい」という俗信もよく知られている。

『民俗学』1巻5号（1929年）に、竹本健夫は石見地方に伝承される狐の嫁入りについて「日が照っているのに雨が降ることがある。その時は狐が嫁入りするのだという。指を組んでその隙から遠くの山際を望むと嫁入りが見えると言ってよく私もやったものだ」と紹介している。この記事にヒントを得た南方熊楠は同誌の6号（1929）に「狐と雨」という論考を発表している。

竹本健夫氏の「石見通信」に、日当り雨の節、指を組んでその隙から遠く山際を覗けば、狐の嫁入がみえるという、と記されてある。紀州田辺でも、日当り雨の際、指を組んでその前で、口を尖らし犬の字を三度かくまねして、三度息を吹き、組んだ指の間より雨を覗けば、狐の嫁入行列がみえるという。ただし、指を無法に組んではみえず。定まった組み方がある。かつて荆妻から伝授したが、口ハでは教えられぬ。また日当り雨の最中に、拙宅より遠からぬ法輪寺という禅刹の縁下を、吹火筒で覗いてもみえるという〔南方1929〕。

狐の窓

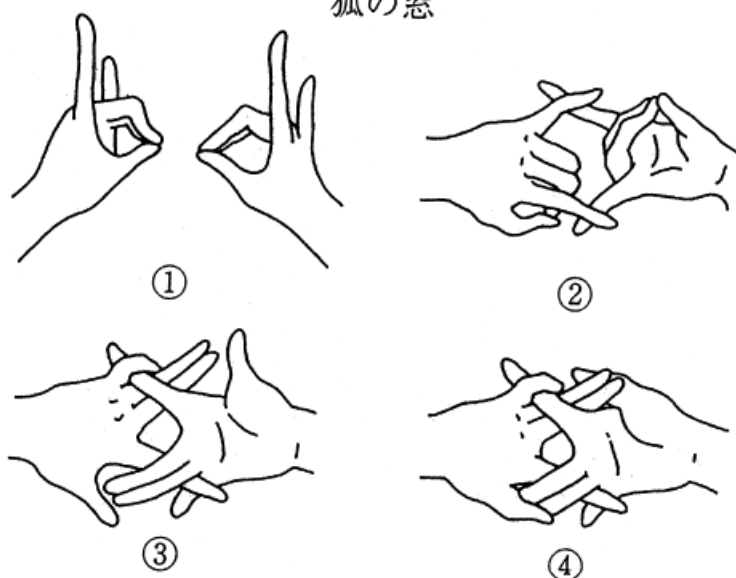


図1 狐の窓の作り方

日当り雨（天気雨ともいう）とは、日が照っているのに雨の降る天気のことである。狐の嫁入りは「狐火が多く連なって嫁入り行列のように見えるもの」（『広辞苑』）だが、日当り雨のことを狐の嫁入りということもある。南方の「狐と雨」を受けて、翌年の『民俗学』2巻4号に白井一二が「東三河の狐の嫁入」を報告している。白井によれば、「狐の嫁入り」といった場合には「日が照りながら雨の降る時、井戸の中や松林の中に行くという狐の嫁入行列を指す」場合と「夜、道や田の中で増減する火、所謂狐火を指す」場合の二通りがあるという〔白井 1930〕。前者の日当り雨のときには、南設楽郡新城町（新城市）では「播鉢を被って井戸をのぞくと見える。指を組合せるのを〈狐の穴〉という。それを作ってその穴から雨の中を覗くと見える」といい、宝飯郡牛久保町（豊川市）では「指を組み合わせたのを〈狐の窓〉と呼ぶ。その窓から雨の中を見ると見える」という〔白井 1930〕。見えるというのは当然「狐の嫁入り行列」が見える意であるのはいままでのない。晴れているのに雨が降るという現象を異状視する伝承は諸外国にもあるが、この日当り雨を狐の嫁入りと呼ぶことについて板橋作美は「結びつくはずのない〈晴〉と〈雨〉が結合すると、同じく結びつくはずのない〈狐〉と〈嫁入り〉が結合してしまうことを、この俗信は言おうとしているのだと考えられる」と述べて、気象における晴と雨の区分の混乱が人間と動物の区分の混乱に連動している関係を論じている〔板橋 1998〕。

② 狐の窓から覗く

日当り雨の際に特別な指の組み方をしてその窓（穴）から覗くと狐の嫁入り行列が見えるというほかに、狐火がでたときにもこの窓からのぞいて相手の正体を見破ったり、あるいは、窓から息を吹きかけて退散させる。

ところで、先に南方が、狐の嫁入行列を見る指の組み方に定まった形があるといっているのは「狐の窓」とか「狐の穴」「狐格子」などと呼ばれるしぐさのことに他ならない。南方は明治42年（1909）の日記に「松枝曰く、田辺、日あたり雨のふるとき、両手にて狐頭の状をなし、合せて（口にて犬という字を三度かくまねし）其すきまより山を臨めば、狐の嫁入見ゆる。狐の窓という」と、妻の松枝から聞いた話を書き留めてスケッチを添えている〔南方 1989〕。狐の窓をつくるのに実際にどのように指を組



図2 狐の窓（「新板化物念代気」文政2年）

み合わせるのかは図1が参考になる。最初に①のように両手の中指と薬指を曲げて親指につけた狐頭の形をつくり、それから順に左右の指を組んでいく。特徴的なのは、手の平と甲が同時に両面にある点で、これは裏と表が同時に存在するという形で、象徴的に解釈すれば、異なる二つの世界に接しているながらそのどちらでもないという境界性を表現している。そこに開けられた中央の窓（穴）は、まさしく妖異の潜む異界を透視する隙間としての意味を帯びている。

狐の窓に関する記録は、藍亭晋米作・歌川国丸画『新板化物念代気』（文政2年・湯本豪一氏所蔵）に「化もの見やうの事」と題して挿絵とともに紹介されている（図2）。それには「此見やう八日にも時にもかまハづ なんでもあやしいと見たらバ づのごとくゆびをくミ けしやうのものかましやうのものか 正たいをあらハセト三べんとなへてのぞけハ もとのすがたをあらハす」とみえている。また、文政13年に成立した喜多村信節の『嬉遊笑覧』には「わらべの戯に左右の手をうしろ前にして指を組合せ、中に穴あくやうにする、是を狐の窓といひて其穴より覗き見る事すなり（中略）狐の窓の戯は是其穴より狐を覗くなり、狐火を狐の挑灯ともいふ」とでている。子どもの遊びになっていたほどだから、かつてはよく見かけるしぐさではなかったかと思われる。筆者も、1994年に鹿児島県与論島を歩いたとき、地元菊千代さんから、マジムン（魔物）に出合ったときには狐の窓とよく似た形に指を組んで穴からフツと息を吹きかけると難を逃れると教えていただいた。長野県北安曇郡では、「狐食ってうまかった尻尾の先は窓にかかった」と言って両手で狐の窓をこしらえて三度吹けば狐火は消えるという〔信濃教育会1932〕。ただし、この窓（穴）からのぞいたり息を吹きかける相手は狐や魔物であって、人に向けて行なってはならない。大分県直入郡では、狐の窓から人を吹くと吹かれた人が死ぬと伝えている〔高田1925〕。

狐の窓は別名「狐格子」ともいう。これは、家の上部に取りつけられた格子窓を「狐窓」とか「狐格子」と呼ぶことと共通の発想に拠っていると考えられる。それは、こちらの窓（穴）から相手を見ることはできても、相手には容易にこちらの姿を見られない、つまり、身体の肝要な部分を覆い隠したうで相手を覗き見ていることを意味しているのであろう。

〔付記〕

本稿は拙稿「股のぞきと狐の窓」（『しぐさの民俗学—呪術的世界と心性』2006年、ミネルヴァ書房）をもとに、いくつかの新資料を加えてまとめたものである。

引用・参考文献

- 石川県図書館協会 1933 『三州奇談』 223 頁
板橋作美 1998 『俗信の論理』 90～92 頁 東京堂出版
伊藤最子 1939 「妖怪名彙」『民間伝承』 4 卷 11 号 130 頁
折口信夫 1976 「萬葉集講義」『折口信夫全集』 第 9 卷 166 頁 中央公論社
小池淳一 2006 『伝承歳時記』 飯塚書店
国学院大学民俗文学研究会編 2009 『傳承文藝 第二十一號—宮城県気仙沼市及び本吉郡昔話集』
小松和彦 1994 『妖怪学新考』 230 頁 小学館
信濃教育会北安曇部会 1932 『北安曇郡郷土誌稿』 第 4 輯 郷土研究社
白井一二 1930 「東三河の狐の嫁入」『民俗学』 2 卷 4 号 民俗学会
関山守彌 1982 『日本の海の幽霊・妖怪』 3 頁 関山トシエ
高田十郎 1925 「各地のいひならはし 其六」『なら』 通卷 32 号
常光徹 1999 「股のぞきと狐の窓—妖怪の正体を見る方法」『妖怪変化 民俗学の冒険③』 筑摩書房
長野県 1986 『長野県史 民俗編 第四卷（三）北信地方 ことばと伝承』 535 頁 長野県史刊行会
中村和二郎 1959 「つまりの俗信—その資料第二集—」『高志路』 通卷 184 号 新潟県民俗学会
新潟県 1982 『新潟県史 資料編 22 民俗・文化財— 民俗編 I』 685～686 頁 新潟県
日本随筆大成編輯部 1973 『日本随筆大成』 第 2 期第 2 卷 176 頁 吉川弘文館
氷見市史編修委員会 1963 『氷見市史』 165～166 頁 氷見市役所
南方熊楠 1929 「狐と雨」『民俗学』 1 卷 6 号 民俗学会
南方熊楠 1989 『南方熊楠日記 4』 342 頁 八坂書房
宮本常一 1930 「周防大島二」『旅と伝説』 3 卷 2 号 49 頁 三元社
宮本常一 1994 『周防大島を中心としたる海の生活誌』 223 頁 未来社
宮本常一他編 1974 『早川孝太郎全集』 第 4 卷 212 頁 未来社
森俊 1993 「魚津市古鹿熊のカンジキをめぐる俗信」『とやま民俗』 44